

道 徒 の 聖



Copyright, 1957, by Glenn E. Nielsen, Trustee-in-trust for the Coppy Ward Mural Trust.

末日聖徒イエス・キリスト教会

内 案 書 図

教義と聖約	高価なる真珠	上質革製合本……一〇〇円
モルモン経	教義と聖約	合本……三〇〇円
高価なる真珠	モルモン経	(新訳)……二〇〇円
モルモン経	信仰箇条の研究	……三三〇円
モルモンとは	完成への道	……二〇〇円
初等協会教科書	総合聖句の手引	……一五〇円
日本系図探究要覧	古代アメリカの生活	……一〇〇円
旧約聖書物語	家督権の祝福	……一〇〇円
扶助協会手引		……五〇円

日曜学校用

宗教と生活 II	よきおとづれ	聖書物語	福音の実践	聖典中の指導者
……一五〇円	……一〇〇円	……一五〇円	……一五〇円	……一五〇円

M I A 用

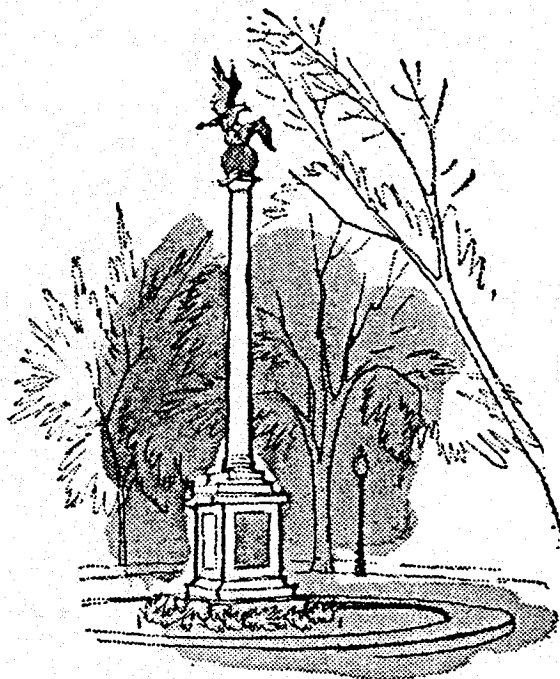
役員と指導書の手引	Mメン・グリーンナーの手引	演劇指導者基礎知識と脚本集	演説が上手になる法	社交ダンス必携	新しいフォークダンス
……一〇〇円	……一〇〇円	……七五円	……一五〇円	……一六〇円	……五〇円

讃美歌及び歌集

末日聖徒讃美歌	末日聖徒讃美歌抜萃	子等は歌う	レクリエーション歌集
……三〇〇円	……三〇〇円	……一〇〇円	……四〇〇円

聖徒の道

1960年8月号



〔予言者のことば〕

家庭と青年の力……………デビッド・O・マッケイ…(226)

〔伝道部長メッセージ〕

天の祝福……………ポール・C・アンドラス…(229)

「モルモンの教義」

地球の創造とその将来(15)……………佐藤竜猪…(232)

聖地を巡りて(2)……………渡部正雄…(237)

かもめの奇蹟(開拓者物語)……………(241)

【大会説教】

人はまた生きるにちがいない……

ミルトン・R・ハンター…(244)

志津川だより

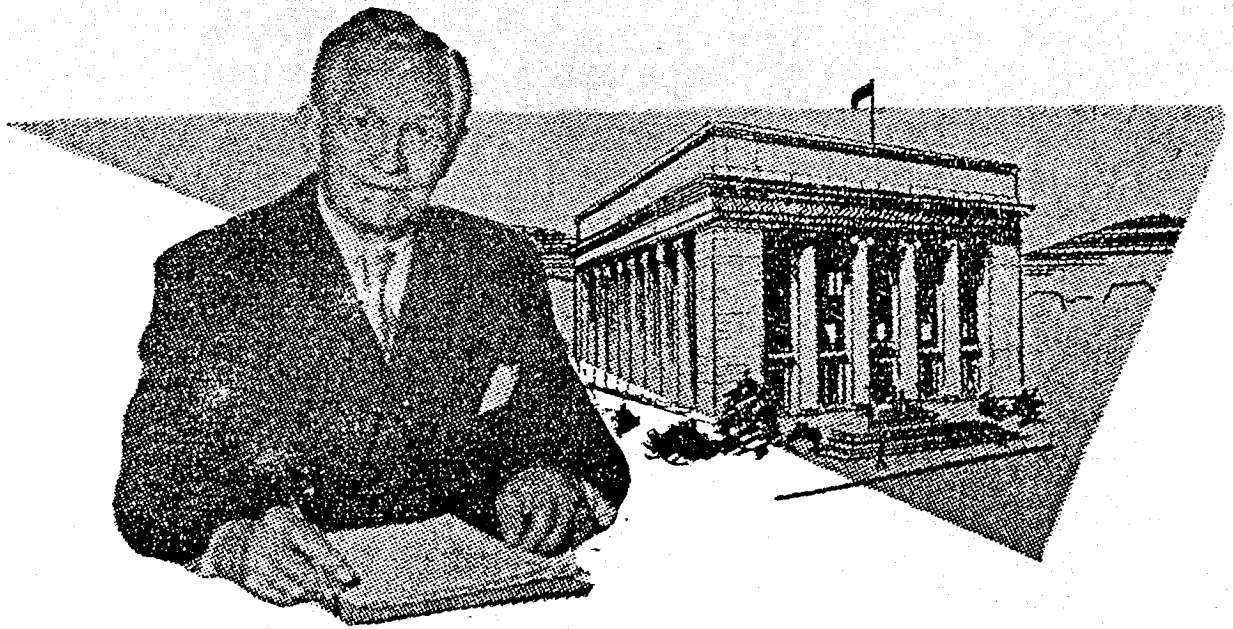
「心の貧しき人」……………阿部順夫…(249)

末日聖徒イエス・キリスト教会歴史粹(8)

ジョセフ・フィールドディング・スミス…………(251)

伝道本部だより……………(256)

も・く・じ



予言者のことば

「家庭と青年の力」

大管長 デビッド・O・マッケイ

若い人たちよ。各々その永遠の行末に直面している若い人たちよ。この人たちを幸福にするのに私たちは何をしたらよいか。この人たちをこの世の立派な市民たち、末日聖徒イエス・キリスト教会の忠実な会員たちにするのに私たちは何を言ったり何をしたらよいか。私たちはいろいろな考えによって自分を鍛える。あの若い金持ちの司^{ジョー}が一つの偉大なことをして永遠の生命を得ることはできなかったと同じ様に、幼児に与えると一つでその将来を決定するような偉大なものはこの世の中にない。しかしこの世の中には多くの小さな事がある。幼児が規則正しく食事をとってその体が成長するように、人格というものは多くの小さな事によって、毎日の経験によって、また或る場合の影響によってもしくはほかの場合の事実や真理によってつくられるものである。

以前私は血統の良い一匹の子馬を訓練することを非常に楽しみにしていた。この馬は性質が良く無きずで、均齊のとれた上品な眼をして居り、釣り合のとれた体格その他優れた馬のもっている良いところを全部もっていた。人を乗せてはいそいそと進み、物わかりがよく、乗手の思うように動く、全くこの上もない良馬であった。彼と私の飼犬スコティは本当によい友だちであった。私は

彼が恐わがっているものへ近寄って行くいつものやり方を好んだ。彼は私の命ずる通りにするなら決して害を受けないと固く信じていた。

しかしこの子馬ダンディはつないで置かれると腹を立てた。彼はつないで置かれることに不満で、いつも綱をかみ切っては自由になった。しかし逃げ去ろうとはせず、ただ自由を欲しただけであつた。彼はほかの馬たちも同じように自由になりたいと思つていてと考え、進んで行つてほかの馬をつないでいる綱を切つたものだ。彼は牧場に閉ぢこめられていることがいやで、垣根の一部分にとげのない針金だけが張つてある所をみつけると、その針金を注意深く足で搔いて踏み越え、よく外へ出て行つたものだ。私の隣人は再三親切にも彼を元の牧場へ戻してくれた。彼は入口の扉を押して開けることさえも覺えた。彼の破壊は私を腹立たせ、或る時は高い金についたが、それでも私は彼の聰明と誠実とをほめていた。

しかし、彼の好奇心と隣り近所を探り歩きたい心とは、私と彼とを困らせるようになった。一度彼は街道で自動車に突き当り、車がこわれるやら自分だけがをするやら、運転していた人には大したことではないが傷をさせるという始末になつた。

この事故から回復した時、まだ放浪したい思いに駆られて彼は垣根を隅から隅まで調べあげた、ところが牧場の門

さえも針金でしばつてあることがわかつた。そこで暫らくの間私たちはダンディが牧場から逃げるおそれがないと思つていた。

しかしながら或日のこと、誰かが門を針金でしばらないで放つておいた。ダンディはこれを見つけるとかけ金を外してしまい、友だちのニッグをつれて隣りの人の牧場へ入つて行つた。二匹は物置になつてゐる古家をみつけた。ダンディは好奇心に駆られてその家の扉を押し開けた。彼が推測した通りそこには一袋の穀物があつた。占めた！だが何という悲劇であつたらう。その穀物にはネズミを捕るために毒が仕込んであつた。数分の後ダンディとニッグとはけいれん的苦痛を覺え間もなく二匹とも死んでしまつた。

このダンディはわが国の青年男女とよく似てゐるではないか。彼らは悪人ではない、彼らは悪事をするつもりはないのであるが、感情に走り易く元氣に満ち好奇心そのものであつて何かしたくてたまらない。彼らもまた束縛されると反抗的になるが、いつもいそがしく仕事をさせ注意深く正しく指導すれば、よく言うことを聞き有能であることを証明する。しかし指導をせずに放浪するに任せるならば、彼らもまたすべて誘惑にとり巻かれ、悪のわなに落ち入ることがきわめて多い。人々や国民を変えるにはわれわれは彼らの考え方を変えなければならぬ「子をその道にした

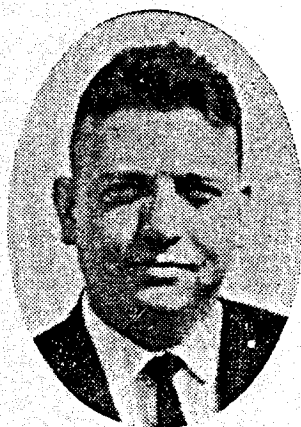
がいて教えよ……」(しんげん二十一〇六)。それはわれわれの義務である。家庭はこの訓練を施すに当って最も潜在的な影響力をもっている。日曜学校、MIA、初等協会、扶助協会等は補充的のものでしかない。どんな社会事業団体も教育関係団体も福祉事業団体も、少年を一人前の大人に育て少女を一人前の大人に育てるに当って家庭に代る有力なものになることはできない。

大人も子供も悪いことをして幸福を感じる者は一人もない。自然そのものでさえその行為には或る限界のあることを教えている。しかし、あのダンディのように私たちはその限界を破って危険を冒したがるが、若い人たちはその危いことをはっきりと悟るべきである。成長と幸福とはある限定された範囲の中で得られる。この範囲を逸脱すればそれは危険有害な耽溺となるのである。食の中に楽しみと健康がある。しかし大食をすれば苦しみと病気を生ずる。適当な運動をすれば愉快であるが過度に力を出せば苦痛となる。あらゆることに於て自然は告げている「ここまでではよろしい、それ以上に行くな」と。家庭は子供たちに自制を教え、克己の楽しさを教え、他人の権利を尊重することを教える世の中で一番よい場所である。子供の生活の中にある不幸は、大人の生活に於けると同様に自然の法則と社会の法則に一致しないところから生ずる。家庭は将来自然と社会が要求する服従の徳を発達させる一番よい場所であ

る。現代の青年には社会の慣習に背くことを好む者が非常に多い。彼らは両親がすでに旧式であると考えている。他人の権利を侵害したいと思わない限り、何をしようと完全に自由であるということを知ることこそ大きな教訓ではないか。

子供が遵奉の原則を学ぶに最もよい時期は三才から五才までの間である。もし両親がこの期間に子供を抑えないなら、将来手に余るようになるにちがいない。そこで、子供にまず服従を教えることにより子供を幸福にすることによって、家庭が非常に有力なものであることが容易に了解されるような気がする。私は子供たちを無理に押したり引きずったり閉ぢこめたりすることを言っていない。ただ子供たちをして安全な範囲に於て完全に自由に発達させよと言っているだけである。そこで子供たちに優しいけれども、勝手なことはさせないぞというがっちりした固い手を感じさせよ。

私は、家庭が子供の幸福にとって第一に力になるのは、子供たちの心に限界を越えようと安全でないという事実を植えつけることであると思っている。次は他人の権利をよく考えよということであり、第三は家庭が信頼と慰めのかわされる場所であると思わせることであり、第四は家庭が人生の悩みとわずらいを離れて静かに休む避け所であるという考えをいつも心に抱かせることである。



天の祝福

ポール・C・アンドラス

「高価なる真珠」の中に、これまで人間に啓示された中最も人の心を照らす真理の一つがのっています。すなわちモーセの書第一章三十九節に「見よ、これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり」と神はモーセに向って仰せになつて居ます。宇宙の偉大な支配者である御方の主な関心と興味とが、あなたや私を含めたすべての人類の進歩と救いであることを実感するとき、直ぐに私たちの心は天の御父の独り子であるこの偉大な御方に対する感謝の気持ちと愛とで一杯になります。まことに神の一番大きな喜びは神の子らに数々の祝福を与えることであります。

この数々の祝福の中には無償で与えられる賜物もありますが、そのほかの賜物は働きによって自分のものにならなければなりません。

神から与えられる最も大きな無償の賜物の一つは、この地球上に住むという特権であり、今一つの大きな賜物は墓から復活することです。あらゆる人類は一人のこらず、イエス・キリストが十字架の上に死んで復活したもうたことによって「不死不滅」になるという祝福を無償の賜物として神から与えられています。しかしながら、すべての中で最も大きな祝福のいくつかは無償の賜物ではなくて服従という働きによって自分のものになくはなりません。神は、神の子らがすべて最も優れた祝福を受けるように願っておいになります。神は正しい神でありますから、力の限り神の誠命をよく守る神の子らにだけこれらの最も優れた祝福をお授けになることができます。

アメリカのユタ州には世界中で最も祝福された人々が住んでいます。

す。この人々は山々にとりかこまれた美しい高原に住んでいます。この人々の農場からは豊かな収穫があり、貧乏に苦しむ人々はほとんどなく、たとえあつてもその人々は教会が世話をしています。この人々の家庭は愛と喜びに満ちて居り、両親と子供たちは豊かに神の祝福を受けて居ります。この人々は日曜日毎に美しい教会堂で神を礼拝し、それらのすばらしい建物の中にある立派な施設で、一週間毎日いろいろな活動をしています。ユタ州には四つの神殿があつて、教会員はこれまでに世を去った各自の親戚や愛する人たちのために、これらの神殿へ行つて神殿の儀式を行うことができます。この人々は本当に幸福な、そして多くの祝福を恵まれている民であります。神さまは、どうしてこの人々に、これほどまでに豊かな恵みを現在与えておいでになるのでしょうか。

たった百十何年前、ここは不毛の荒地であつて、住んでいたものは野獣と山の中を移り住んでいるインディアンたちだけでありました。そしてモルモンの開拓者たちがソルトレークの高原へ始めて入つて来たとき、そこには目に入る一本の立木もなく、土地は固く焼けついていて、土を耕やそうとして打ち込んだ「すき」の刃が欠けたほどでありました。

開拓者たちはそれまでに千マイル以上にのぼる旅をして来て、体は非常に疲れ、病み且つ弱っていた上に、食料はほとんどなく、冬が間もなくやって来るのでした。彼らは夏がまだのこっている中に

種を蒔き収穫をはからねばなりませんでした。取り入れがなかったら、これからやってくる冬の寒さの中で飢え死をしなければなりませんでした。モルモン開拓者の物語ほど人の心を感動させる話は人間の歴史のどこを見てもありません。私は教会員の一人一人に、百年以上前にこの教会へ加入した人々の話を是非読むようにすすめます。(当教会の略史は、教会本部へ御注文下されば一部百円で購められます)。モルモンの開拓者は荒野を薔薇の如く華さかせ、奥深い山中に盛んな文明の社会を切り開くことに成功しました。どうしてこれらの開拓者は、この巨大な事業を完成することができたのでしょうか。

モルモンの開拓者が成功したのは、彼らが最も苦しい逆境に直面しても、神の誠命を守ることを忘れなかったからであります。彼らが神の誠命を守り通したので、現在ユタに住むモルモンの人たちは祝福された幸福な人たちであります。正義の民が神に愛されるのは永遠の原則であります。「教義と聖約」の第百三十章二十節および二十一節に誌してある聖句は、この原則をはっきりと述べてあります。「そもそも創世の以前より天に於て定められたる一つの変らざる律法ありて、あらゆる祝福はこれに基くなり。すなわち、われら何にても神より祝福を受くる時は、この祝福の基く律法に従うによりて然るなり」と。神の律法と誠命に服従することは私共にとってぎせいであると思われる時があります。それはサタンとその軍勢と

が地球上に広く存在し、サタンが此世の事を以て人々を盲目にしようとしているからであります。私たちは讚美歌の中で「ぎせいは天の恵みをもたらし」と歌っています。その通り、最上の天の恵みを受ける者は、どんなぎせいを払っても教会の教えに従う人々だけであります。この原則を決して忘れてはなりません。

これから日本、韓国および沖縄に住む無数の人々が、神の賜わる優れた祝福を受ける時が近づいて居ります。その時、これらの人々の中にはほとんど貧しい者がなく、これらの人々は家庭に在って幸いと喜びに満ちて生活するにちがいありません。両親と子供たちは愛と和合の中に共に暮すにちがいありません。日曜日には神を礼拝し、美しい教会堂の中で神に感謝を捧げ、そして一週間毎日、多くの教会堂に属する立派な施設の中でいろいろな活動を共に楽しむにちがいありません。近くには神殿があつて、ここで彼らはその先祖や親戚や愛する者たちの救いのために神殿の儀式を執り行うにちがいありません。どのようなぎせいを払っても教会の教えに喜んで従う忠実な「神の子ら」がありますから、これらのことは必らず実現するにちがいありません。

以上のことは必ず実現するにちがいありませんが、その実現する時期は、どれほど多くの教会員が神の教えに忠実に従うかによるのであります。あなたはどうか。あなたは福音の教えを忠実に守っていますか。とくにあなたは肉体的にまた道徳的に純潔ですか。

あなたは正直ですか。あなたは真実を話しますか。あなたは他人を愛しますか。あなたは両親を尊敬していますか。あなたは神を愛しますか。あなたは聖餐会その他の集会に出席しますか。あなたは教会の責任ある地位を受け入れていますか。あなたは安息日を守りこれを聖くしていますか。あなたは「智慧の言葉」を守っていますか。あなたは「什分の一」を納めていますか。あなたは「建築資金」を募るためにあなたの時間と金とを捧げていますか。もしあなたがこれらの誠命を守っているならば、神は神の最も選り抜きの祝福をあなたにお授けになるにちがいありません。しかしあなたがもし守っていないなら、神は神の最も選り抜きの祝福をあなたにお授けにならないにちがいありません。これまでに、バプテスマを受けてこの教会の会員となっている人々が一人のこらずこれらの教えと福音の教えのすべてを守り、かくして、神がこれらの人々に与えたいと望みたまうすべての祝福を受けるよう心からお祈りします。これによって、神の王国が速かに成長して、日本韓国沖縄のいたるところに強く確立するようにお祈りします。正しくあれ。神の誠命を守りなさい、そうすればあなた方は榮えて天の優れた祝福を数々恵まれるにちがいありません。

□

■

□

■

□

■

□

■

□

「地球の創造とその将来」(十五)

佐藤 龍 猪

一つの世界とそれにつける天の過ぎ行く時は、誠に別の世界を生ず。
かくしてわが業にもまたわが言にも終りなし

高価なる真珠、モーセの書一〇三十八

一、多くの地球とその「救い」

主なる神はモーセに向つて、主の偉大な御業とその栄光とは「すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり」と仰せになった(高価なる真珠、モーセの書一〇三十九)。この目的のために地球は造られているのであつて、主の目的はこの地球上に住んでいる神の子らに不死不滅と永遠の生命とをもたらしたもうばかりでなく、また全宇宙に存在している無数の地球上に住んでいる神の子らにも不死不滅と永遠の生命とをもたらしたもうことである。これらの地球は人にとっては無数であるが、父な

る神にとってはすべて数えられている(高価なる真珠、モーセの書一〇三十五)。主は宣うた「一つの世界とそれにつける天の過ぎ行く時は、誠に別の世界を生ず。かくしてわが業にもまたわが言にも終りなし」と(高価なる真珠、モーセの書一〇三十八)。「天地は過ぎ行かん」(マタイ伝二十四〇三十五、ルカ伝二十一〇三十三)という聖句の中に言つてある「過ぎ行く」という意味は、地球が老年になって死に、すなわち冷却した生命のない物体となつて空間を漂い、おそらく崩壊して滅びた末に、何か宇宙に働く自然力によつて再び創造されるであらうということではない。地球が「過ぎ

行く」という言葉の意味は、将来わが地球に起ると定められた一定の変化を地球が受けることであつて、それを主ははっきりと仰せになつてゐる。われわれの住んでいる地球は一つの生き物である。この地球には律法が与えられていて、地球は将来日の光榮に等しい状態となり、日の光榮を有つ者たちの住処となるように定められている。この地球以外にあるほかの地球が月の光榮を有つ者、星の光榮を有つ者たちの住処として備えられていることは疑いが無い。それは日の光榮を有つことはできない者たち、すなわち不死不滅を得ても(復活をしても)永遠の生命を得る(神の生活に入る)ことのできない者たちの居るべき処がなくてはならぬからである。あらゆる地球は日の光榮のため、月の光榮のため、星の光榮のため、どの光榮に等しい光榮を受けるために創られたとしても、われわれの地球と同じく、死と復活の状態を通り過ぎなくてはならない。それであるから「過ぎ行く」という意味は無数の地球が各々死ぬべき定め「試験の状態」を終えた後死んで復活し、定められた通りの「光榮」を受けて「人間」が永久に住む住処となることである(「救いの教義」第一卷七十二頁参照)。

二、地球の生と死と復活

「教義と聖約」の第二十九章に主がジョセフ・スミスに下したもうた啓示の言葉がある。その二十二節から二十五節に、主は教会員ならびにこの啓示を信するすべての人々に向つて次のように宣うている。すなわち

「誠にまことにわれ汝らに告ぐ。この『福千年』過ぎ去りて人々再び彼らの神を拒み始むる時、その時われ僅の間のみ地を助けおくなり」と。これは主がその再臨に就て、また『福千年』が過ぎた後僅かの間人々が惡に染まるがそれから間もなく終りの来ることに就て述べて居りたもうのである。つづいて「やがて終末は来り、天地は焼き尽されて過ぎ去り、新しき天と新しき地とあらん」と言つてあるが、これはこの地球が過ぎて行つて別の地球がその代りに座を占め、また天が過ぎ去つて別の天がその代りに座を占めるということではなくて、地球とその天とは死を通り過ぎた後に再新されて不死不滅となるということである。この地球は今生きているがやがて死ななくてはならない。しかし地球はその律法

を守っているから、復活によつて回復をし、日の光榮に等しい状態となつて、日の光榮を有つ者たちの住処となるのである。第二十四節以下にはこれが次のように説明してある。すなわち

「すべての者は過ぎ去り、天地すらも、またその中にあるすべてのもの、すなわち人、獸、空の鳥、海の魚も万物ことごとく新しくならん。されど一筋の髪の毛、一粒の微塵といえども失はれることなからん。それらのものは皆わが手によりて造られしものなればなり」と。すなわち、主なる神は地球とその天、および地球上に住む人間のみならずまた御手によつて造られたあらゆるものを救うお積りであることがわかる。人間だけでなく獸も、海の魚も、空の鳥も、みな生ける「靈の結合体」であるから復活によつて再新されるのである。地球もまた生きているものであるから、これらと同じく死んで復活しなくてはならない。（「救いの教義」第一卷七十三頁参照）。

三、神の創造計画

イエス・キリストは御父の指図に従つてこの地球を創りたもうた。もちろん、イエ

ス・キリストのほかに天使長ミカエル、天使ガブリエル、天使ラファエルそのほかがこの業をたすけたのであるが、直接御父の指図を受けて物質を組織し地球という遊星を造り、神の子らの住む処と為したもうたのは贖い主イエス・キリストである。（天使長ミカエルは人類の祖アダムの前身、天使ガブリエルはノアの前身である。「予言者ジョセフ・スミスの教え」百五十七頁「英文」参照）。またイエス・キリストはこの世に来て肉体に宿る前、靈として創造の事業を為し遂げたい、旧約聖書（口語訳以前のもの）にはエホバの名を以てあらわれて居りたもう（「信仰簡条の研究」六百十二頁参照）。イエス・キリストは人間の光であり生命である（「教義と聖約」九十三〇十）。この世界が創られる前から創造主であつた。生命はこの地球上で始めて発生したのではない。また「人間」もこの地球上で始めて発生したのではない。御父は靈が永遠なるものであつて、過去現在未來を通じて常に在るものであることを仰せになつている（「高価なる真珠」アブラハムの書三〇十八、「教義と聖約」九十三〇二十一―二十三、「救いの教義」第一卷七十四頁参照）。

四、万物の創造

万物はこの地球上に具体的な物として在るに先だち、「天」に於て靈として創られた。「地の面にも水の中にも空の中にもい

まだ肉ある者のなかった」(高価なる真珠モーセの書三〇五参照)前に、野のすべての木、野のすべての草およびあらゆる生き物は靈として創られていた。創世紀、高価なる真珠のモーセの書および(モルモン教の神殿)にある天地創造の説明は、具体的地球と具体的動物植物および人間の創造を説くのである。これらの具体的創造は自然に存在する諸々の元素から為された。しかしながら、どの書にも人間そのほかのものが靈として割造された時の記事は見当らない。聖典(創世紀二〇五、高価なる真珠、モーセの書三〇五)はこれが具体的創造をされる以前にすでに靈として創造されていたことを説くのみである。すべての人間はこの地球上に生れて来る前、すでに久遠の昔に靈として創られた。諸々の靈もしくは「英知たち」に救いの計画が知らされたのは創世以前のことであった(高価なる真珠、アブラハムの書三〇二十二)。そ

れであるから、人間も動植物も創世紀にある地球創造の時に靈として創られていたのではなくて、それよりも遙か以前に靈として創られていたのである。

創世紀第一章と第二章にある天地創造の記事は靈の創造を説いてはいない。それは地球とその上にあるあらゆるものの具体的創造を物語っている。しかしながら、あらゆるものはアダムの墮落を境として本質が全く異っている。モルモン経ニーフアイ第二書二章二十二節には「さてごらん、もしもアダムが罪を犯さなかったならば、彼は墮落をせずにそのままエデンの園にいたであらう。そして創造された万物は造られた後の状態そのままに続いてあったに違いない、また必ずそのまま永久に続いて終りがなかったであろう」と誌されてあるから、アダムの墮落以前の被創造物は具体的であったが同時に靈的のものであったことがわかる。

主がアダムを創造すると仰せになったとき、主はアダムが靈界に於てミカエルと呼ばれていた久遠の昔に靈として創られたことは一言も触れておいでにならない。アダムの体は「土のちり」から造られたが(創

世記二〇七)、その土は靈性のある土であった。アダムは自分を支配している律法を破つて「死ぬべき身」となるまで、骨肉を具えた一種の靈体を有っていた。「死ぬべき身」であるわれわれの肉体は血液によって生かされているが(創世紀九〇四、レビ記十七〇十一・十四)、骨肉を具えた靈体は血液によらずに「^{スピリット}」によって生かされる具体的体である。アダムがエデンの園に居た当時の体はこの種の体であつて、血液によらず「^{スピリット}」によって生かされていたから、死を受けることなく、律法を破らなければいつまでも生きて居ることができたのであった(「救いの教義」第一卷七十六頁参照)。

五、時の計算

この地球が創造された時の計算は現在のよいうな時の計算でなくて、「日の榮の時」すなわち「主の時」または「コロブ(星)の時」の計算であつた。アブラハムに与えられた神の啓示には次のように言われている。

「主ウリムとトミムによりわれに宣いけるは、コロブはその廻転によりて生ずる時と季とによれば主と同様なり。またコロブの一廻転は主の計算によれば主の一日なり、而して

これは汝の今立つところのものに定められたる時に従えば一千年に当るなり。これコロブの計算による時の計算なりとす」(高価なる真珠、アブラハムの書三〇四)。

またアブラハムの書の附図の説明には「最初の創造物を表わすコロブにして日の榮すなわち神の住いに最も近し。これは支配に於て第一、時の計算につきて最後なり。日の榮の時の計算、日の榮の時の一日は一キュビットを表わす。コロブの一日は、この地球の計算によれば一千年に相当す」と(高価なる真珠三十四頁参照)。

主はアブラハムに向つて、アダムが律法を破つて「墮ちる」前、アダムの時わきてはコロブの時であつたと知らせたおいでになる「さて、われアブラハム、時は主の時に等しきを見たり。その時はコロブの時に等しかりき」(高価なる真珠、アブラハムの書五〇十三)と。これによつてこの地球が創造されてからアダムが「墮ちる」までの時の計算は「主の時——永遠の時」すなわち「日の榮の時」または「コロブ(星)の時」の計算であつたことがわかる。

聖書の年代記によれば、アダムがエデンの園から追放されてから今まで約六千年経

つていふことになる。黙示録の第五章以下十章までには、子羊によつて開かれる七つの封印のことが誌してあるが、その一つ一つの封印はこの世の存在に關わる一千年の期間を表わしている(「教義と聖約」八十八〇九十二—百十六参照のこと)。また「教義と聖約」七十七章の六—十五節までは、このことに就てさらにくわしく次のように誌してある。すなわち

六問、裏に七つの印を以て封印したる、ヨハネの見たる巻物によりて何を理解すべきか。

答。その巻物は啓示せられたる神の聖旨と、神の興義と、神の御業とを載せ、またこの世のつづく七千年間、すなわちこの世が存在する期間に關する神慮の秘密を載せたるものと覺るべし。

ここに、この世がつづくのは七千年であると明らかに言つてあるが、これは地球とその上にあるものを治める権能を与えられたアダムが律法を破つたときに呪いを受け「墮ちた」地球のことを言っている。そこでアダムがエデンの園から追放されなかつた地球は、アダムが「死ぬべき身」でなかつたと同じように「死ぬべき」地球では

なかつたことがわかる。再びニーフアイ第二書第二章二十二節を参照されたい。また「教義と聖約」第七十七章十二節には「……主なる神は第七千年目の始めに當り、この世を聖め、人類の救いを完うし、あらゆるものを審き、ただ御手の中に置きたまわざるものを除きて、その他の者をことごとく贖いたまわん……故に七人の天使のラッパの音は、第七千年目の始めに於ける神の御業の備えと結びなり。すなわち、彼のやがて来りたまわんとき途の備えなりと解すべし」とある。

更に、われわれの救い主は「時の絶頂」すなわち「時の真中」にこの世に來りたまうた。その神權時代は「時の絶頂」すなわち「時の真中」の神權時代である。「時の真中」とは「今の時」の始めから終りまでの「真中」ということである。この地球が「今の時」の始めから約六千年経過した後「福千年——千年期」とその長さが明示してないが「暫しの時」とがあつて合計して約八千年の「時」がある。従つて「時の真中」とはアダムの「墮ちた」時から約四千年の後である。この時に救い主はこの世にあらわれたもうた。そうすると「福千年」の始めは何時來るか、ずっと遠い先のことでなくて、意外に間近に迫つて

いることはこの「時の計算」が示している。「救いの教義」第一巻七十八―八十一頁参照）。

六、世の終りと地球の終り

「世の終り」(The end of the world)と「地球の終り」(The end of the earth)とは同じことを言っていない。「世の終り」は、地球とその上にあるものがことごとく焼き尽されて万物が一新することではない。イエスが十字架にかかりたもう前に、イエスの弟子たちは御許に来てエルサレムの滅亡と「世の終り」とに就いて更に御教えを乞うた。このことはマタイ伝第二十四章三節に誌してあるが、普通の聖書ではこの「世の終り」が何であるかそんなにはつきりとは言っていない。予言者ジョセフ・スミスの改訳聖書には次のように誌してある。

「而してイエス彼らを去り、オリブの山に上りたもう。イエス、オリブの山に坐したまいし時、弟子たちひそかに御許に來りて言う『われらに告げたまえ。この宮とユダヤ人の滅亡とに就きて、汝の言いたまいしこれらのことは何時あるか。また汝の來

りたもうと、世の終り、すなわち世の終りなる悲しき者の滅亡とは何の前兆あるか』と。イエス答えて言いたもう『……また王国のこの福音は、すべての国民に証をなさんため全世界に宣べ伝えられん。而して後に、終りすなわち悲しき者の滅亡は至るべし』と」(高価なる真珠、ジョセフ・スミスの著二)

以上のように主は地球の終りに就ては語っておいでにならなかったし、また弟子たちも地球の終りに就いて尋ねていなかった。弟子たちの尋ねていたのは今の世に在る悪人たちの滅亡、すなわち悪の終りを告げるキリストの再臨に就いて尋ねていたのであって、主はそのことをお答えになったのであった(「救いの教義」第一巻八十五頁参照)。

日本語の訳文に於ては「世の終り」と「地球の終り」とが同じように使つてある場合があるから、文の前後関係を見て正しい解釈をつけられたい。

余 録

「教義と聖約」第九章二節に「さて見よ、われは汝に力を与えて以て穢穢を助けしめ

んとするな。他の記録を有す」とあるが、この「他の記録」とは「なおほかのニーファイ人の記録」のことを言う。オリヴァ・カウドリは、始めの通り終りまで忠実であつたならこの「他の記録」を穢穢する助けをしたことであらうが、彼は教えに背いて十一年の長きに亘つて教会と離れていたから、後に正会員の資格に復したとは言え、その間に失つてしまつた祝福のいくつかはついに再び得られなかつた。

この「他の記録」に就いてブリガム・ヤング大管長は次のように話している。すなわち「ジョセフ(スミス)が始めあの金版を手に入れた時、天使がジョセフに命じて、穢穢がすんだら戻すためにクモラの丘へもつて来いと言つた。それで、ジョセフはその通りにした。オリヴァの言によると、ジョセフとオリヴァがそこへ行つた時、クモラの丘が開けて二人は一つの洞窟の中へ入つて行つた。すると、その洞窟の中には一つの大きな広々とした部屋があつた。その時、日の光が何かに人工的の光があるとは思わなかつたが、部屋の中は白昼のように明るかつた。二人は

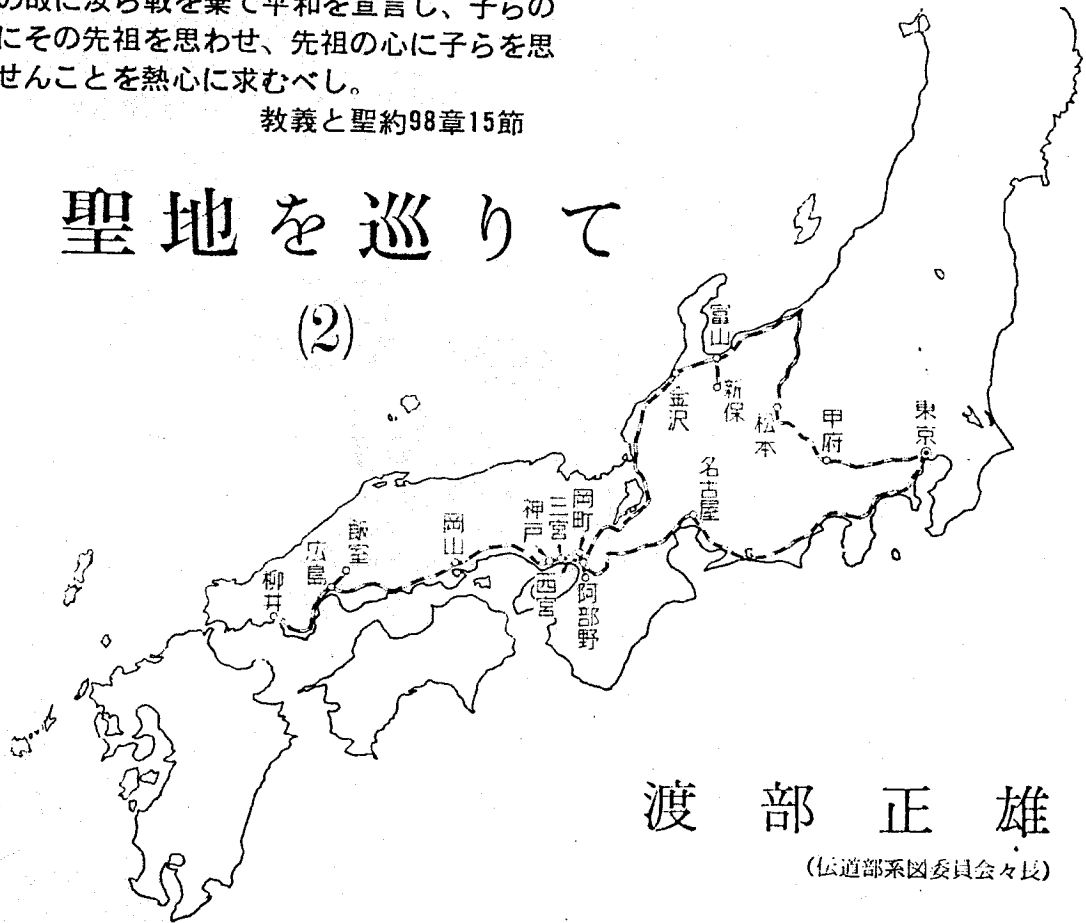
(二四三頁につづく)

この故に汝ら戦を棄て平和を宣言し、子らの心にその先祖を思わせ、先祖の心に子らを思わせんことを熱心に求むべし。

教義と聖約98章15節

聖地を巡りて

(2)



渡部正雄

(伝道部系図委員会々長)

〇三宮支部

六甲山を背景に遙かに神戸港を見下す岡の上に建っているのが三宮支部で、階下のホールのウインドー越しに緑の芝生と紅白のつじの咲きみだれた美しい庭がゆるやかな傾斜をなして展開されている。この景勝の地に建てられた支部は地の利を得てか、地方部長の本拠として二重に祝福されている。伝道部長もこの場所を見つけた時、大変気に入って、ここは神戸であるから、きつと神戸の王国が此の地に栄えるであろうと言って買われたそうであるが支部の会員たちは、日本の神殿も先づ此の附近に建つであろうと信じて居られるようだ。私は日本の神殿は先づ霊峰富士山を背に太平洋の波を見下す処だと聞いたが東京中央支部丸山兄弟の先祖の発祥地は富士山麓の神戸（ゴート）と言う処だそうだがこの方がもっとGODに近くなるようだ。果してどちらが先になるだろうか。東中央地方部か、西中央地方部かと、ともあれ先づ先祖をたずねることだ。系図の仕事は少しでも、多くした方に先に神殿が恵まれるであろう。

六月二日夜この三宮支部でアンドラス地方部長以下多くの兄弟姉妹、又丁度大会に来ていた柳井支部の宣教師会員も出席して系図の集会が開かれた。西宮支部ではその前日に既に会を開いたのであったが道場姉妹始め有志の方々が、何度聞いてもよいからと言って参加して下さった御熱意には心から感謝した。三宮支部は今度前柴兄弟を会長として系図の委員会が発足した処だと言って委員一同熱心にノートしていた。その意気込みに前途の活躍を期待しつつ翌三日は岡山に向った。

○岡山支部

幽雅な街に近代建築美を誇る岡山県庁を過ぎるとバスは洋々と流れ行く旭川にさしかかる。橋を越すと間もなく止った処はもう静かな郊外である。懐しい教会の看板を見出し喜び勇んで二階建の民家の門をくぐった。下がホールで少し狭いが、がっちりした立派な据付けの椅子が教会堂としての威厳を保っている。二階の宣教師部屋から池田長老が待っていましたとばかり迎えて下さったがすぐ押しよせた求道者に家庭集會に御多忙だ。今度港姉妹と浜田姉妹がパートタイムミッシヨナリ



応島支部會員

に聖任されるそうで池田長老も大分助かるでしょう。會員たちは岡山支部からは優秀な信者が出るのですが皆、よそに行ってしまうので、ここはすっかりさびしくなってしまうのですよとこぼしていたが夜の系図の集會も人数は割合に少なかったが皆熱心に聞いて下さり感謝した。数名の子供迄参加したが池田長老はこれを機会に子供のクラスも設けようと喜んで居られた。翌日は雨の中をわざわざ日本三公園の一つ後樂園を案内して下さったがこれは旧備前藩主池田綱政創案の庭園であったそうだが池田長老も此の岡山が御郷里だそうで既に系図を調べに親族をたずねられたそ



三ノ宮支部教会堂

うだが私はきつと池田公ともつながっているでしょうから池田厚子夫人の牧場を訪ねられるようにすすめておいた。池田長老の郷土の御親族方も長老の祖父が渡米される時、まさかお孫さんが宣教師として戻って来られるとは予想しなかったであろう。

○広島支部

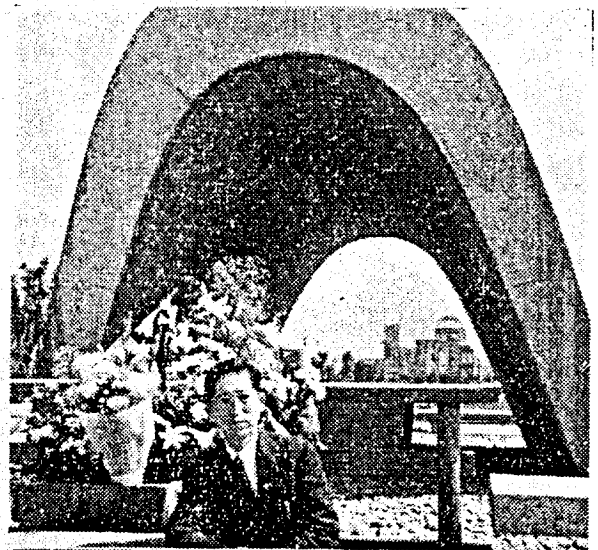
四日、夕刻、世界の広島に着いた。古江で電車を降りてたずねている内、あああの昨日焼けた家の隣ですよと言われて見れば成程焼跡に教会が建っている。これが広島姿なのだろうか。戸口をくぐるとすぐ立派な紳士や



岡山支部の長老たちと共に



「原爆病院にて、村田姉妹とその伯母さん、



「過ちは繰返しませんから、

御婦人が続いて入って来て私に盛にお礼を言われる。私はきつねにつままれたような顔をしていると姉妹の宣教師たちと共に奥で障子張りしていた村田姉妹が出て来られ、この方々は民生委員や婦人会長さんで昨夜の火事のお礼に来られたのだそう。宣教師たちは夜通し手伝われたとのことだが今日は、もうトラクティングに出かけ、夜も帰りは遅いとのこと、風呂場にどろまみれになったズボンが昨夜の奮闘を物語っている。神見島姉妹たちは教会が焼けると言って泣いて駆けつけたそう。こんなに隣家が丸焼けになったのに教会が何ともなかったことは不思議なようだ。やはり宣教師や兄弟姉妹の愛に見守られていたからであろう。翌五日安息日の早朝、真先に顔を見せた築田兄弟にビンガム長老は早速隣家をたずねて、何か神権会員たちのお手伝いすることはないだろうか聞くように頼まれた。隣家では重ね重ねの厚意にすっかり感激して居られたようだ。聖餐式は第一日曜で証会であったが私は、かねがねこの広島の地をとむらいに来たいと思っていたが今、ほんとうに不幸なこの地に眠れる数十万の同胞を真に慰め救い得る道を知り且つその権能を与えられてこの地を訪れることが出来たこと

を幸とし、又それだけ責任を感じると冒頭の教義と聖約九十八章十六節を引用してお互いの決心を新にしたのであった。引地兄弟姉妹其他多くの兄弟姉妹がその強い決意を証されてほんとに嬉しかった。夜は、ビンガム長老が特別大会に出席出来なかった兄弟姉妹たちの為に録音したヒンクレー長老の話を聞いて、引続き系図の今を催し成功を納めた。ビンガム長老が貴方の系図の話是非福岡支部の会員たちにも聞かせたい。旅費を出すから行ってくれないかと言われ、信者を思う宣教師の大きな愛に感激したが、スケジュールに余裕がなかったので感謝辞退した。

翌六日村田姉妹の伯母さんが原爆病院に入院して居られるので、案内していただいた。同室に四肢の不自由な人眼の見えない人、ケロイドの傷痕も痛々しく當時を忍ばせた。どの病室も全国から送られた心をこめた愛の手に折られた千羽鶴で美しく飾られていた。永遠の平和を携えて来たこの千羽鶴に患者さんたちはどんなにか慰められていることであろう。

誰が捧げたかその香も新鮮な花束に遠く原爆ドームを眺めて安置された霊石に、安らかに眠って下さい

過ちは 繰返しませぬから

と刻まれた文字が深く心の中に刻み込まれた
果てしない公園のような緑になびく百米道
路を中心に、幾条にも流れる太田川一面に広
がった美しき近代建築の高層や、橋梁の数々
素晴らしいこの市街は世界中の人々の平和の
祈りをこめて日、一日と進展して行く。広島
市民の前途に幸あれと祈りつつ柳井に向った

○柳井支部

小さな城下街と言った感じの柳井市、駅か
ら真直ぐ五分程行くと溝のような川にかかっ
た石橋に出る。それを過ぎて横町に入った処



三ノ宮系図会

に懐しい教会の看板が掛っている。長老たち
は二階で家庭集会の最中だ。まだ高校生の大
畑兄弟は学校が終ると教会に来て留守番をし
ながら勉強して居られるそうで今日もホール
で熱心に勉強して居られた。系図の集会には
林兄弟御一家を始め二十名近く集り実に和気
藹々と家庭的なふんいきの内に楽しい会を持
つことが出来た。市の入口の割合からすると
この伝道部で一番大きな支部であろう。マノ
長老の顔も自然とほころんで若いながらよき
支部のお父さんぶりを見せている。もうこの
街のトラッティングも何度目だとか言っても
楽しそうである。翌朝駅迄見送って下さり



岡山系図会

介当お土産迄届けて下さる親心、年では私の
子供のようだがやはり支部のお父さんであり
長老だ。丁度岩国迄出勤の中西姉妹と一緒に
なって車中楽しく教会の話が出来たが日本中
否世界中何処を歩いてもこのように主によつ
て結ばれた兄弟姉妹に逢えることは、ほんと
に力強い限りだ。

広島の一つ手前の横川で乗換え太田川を遡
って今日は一日中、宣教師岡畑姉妹の御里に
系図調べだ。可部で乗換えて更に飯室の布迄
行くと川は山間を流れる溪流となつて景色は
絶勝の地である。父方母方の御親戚を併せて
(二四三頁につづく)



柳井系図会

《開拓者物語》

がもめの奇蹟



ブリガム・ヤング大管長が、大ソルトレークの盆地を一目で見たす崖のふちに立った馬車の中から「これこそあの場所だ。あそこへ乗り込め」と言ったのは千八百四十七年七月廿四日の記念すべき日であった。人跡未到の聖地に始めて足跡を印したとき、開拓者たちの胸は限らない喜びにふるえたことであるとは言え、ここへ来る途中、岳人ブリッヂヤーがソルトレークの荒野で一本の小麦でも育つたら、わしは千ドル出そうと挑戦した言葉に背かず、始めて大地に打ち込んだ「すき」の刃は鋭い音と共にね返された。

深い山の中は春の去るころとおそく、冬の訪れるのは早い。ソルトレークに到着するや否や急いで植えつけをしたが、その年はすで

に七月も終りに近づき、多くの収穫を期待するには時期が外れていた。千八百四十七年は、タネジャガイモの収穫がいくらかあったほかは取るに足らないものであった。従って開拓者たちの運命は、来年すなわち千八百四十八年の収穫にかけられていた。開拓者たちは三箇所に製材所を建て、一箇所に製粉所を建てた。また五千百三十三エーカーの土に植つけを終わったが、その中の九百エーカー近くは小麦であった。(註、一エーカーは約四段歩)。

開拓者たちはこれまでに踏みこえて来た苦難の道をふり返った。昨年から今年にかけての冬は幸いにも異常な暖冬であったため、衣類の不足による危難を何とか切り抜けることができたけれども、食料難は実に深刻であった。彼らの手持ち食糧はほとんど底をついたので、山々をあさってセゴユリの根を堀り、あざみの穂先きを煮て食べた。このときセゴユリが開拓者たちの尊い生命を支えてくれた恩恵を記念して、今日セゴユリの花はユタ州の州花になっている。

今や昨年の秋から今年の春にかけての労苦に対する豊かな報いとして、広大な畑一面は緑一色に塗りつぶされ、来るべき大収穫を告

げているようであった。人々は自分たちの為を思い、またその夏に到着するはずであった一団の開拓者のことを思っても始めて心が安らかであった。苦心の結果である灌漑施設によって作物はよく育ち、人々の心は幸福に満ち前途は誠に輝やかかった。

ところが五月から六月にかけて思いもよらぬ災いが襲来した。或日、畑へ出た人は「ばった」の大群が作物を食っていることを発見した。これらの「ばった」はそれまでに山中に居ることがわかって居り、人々は土人が食用にしているのを見て、それ以上大したしるものではないと思っていた。しかし、今や開拓者たちにとってこれが容易ならぬ敵であることがわかった。「ばった」の大群は山中から続々と下りて来て作物を貪り食っている。

彼らは開拓者に戦闘を挑む悪魔の手下のように、数限りなく援軍をくり出して作物を全滅させようとしているのだ。人々は事態の容易ならぬことを知ってが、然とした。「ばった」の大群が通り過ぎるところ、みずみずしい緑の畑はたちまち白骨のような廃墟と化した。彼らを全滅させなければ開拓者たちは全滅する。如何なる手段を以てしても彼らを滅ぼさねばならない。

開拓者は全員を挙げて戦った。考えることのできるあらゆる手段を尽して戦った。畑のまわりに溝を堀って水を満し、その中へ「ばった」を追い落して溺死させようとした。火を焚いて焼き殺そうとした。しかし、この水攻め火攻めも大した効力がなかった。開拓者たちは女子供に至るまで、棒、杖、ほうき、木の切れ、何でも武器になるものを手当たり次第に使って「ばった」を叩き殺そうと奮闘した。しかし、「ばった」の大群は、殺されても殺されても、数限りなく援軍をくり出して来、開拓者たちは今や奔命に疲れて気力も体力も共に衰えてきた。

万策ここに尽き果てた開拓者たちは地上にひざまづいて、静かに父なる神に祈りを捧げた。

祈り終って天を仰ぐと、遙か彼方の大塩湖^{ソルトレイク}上に一団の白雲がむらむらと立ち上ったと見るや、急速に此方へ近づいてくる。人々はまた別の災いが襲ってくるのかと胆を冷やした。しかし、近づいてきた一団の白雲が畑の上空で一せいに展開すると、それは白い翼のカモメの大群であることがわかった。カモメは畑の中に急降下するや、たちまちばったを食い始めた。彼らは「ばった」を食い殺し、

呑み込んで腹一杯に満すや谷川へ行って水を呑み、「ばった」を吐き出すとまた飛んできて「ばった」を食うのであった。白い翼のカモメは日が暮れると帰って行ったが、その翌日もまたあくる日も毎日毎日飛んできては「ばった」を退治し、「ばった」の姿が見えなくなったときカモメもまたその姿を消していた。

開拓者は以前の静けさに返った畑に立って無事に残った作物の緑を眺めていた。突然、火のように熱いものが頭のとっぺんまで突き上ってくると涙が止め度もなく出てきた。彼は「奇蹟だっ」と腹の底から叫んだ。彼はやがてひざまづく涙でくしゃくしゃになった顔も拭かずに長い長い祈りを捧げていた。

千九百十三年九月の十三日、カモメの奇蹟を記念する記念碑の除幕式がソルトレーク市の神殿構内で行われた。ブリガム・ヤング大管長の孫に当るマホンリー・M・ヤングの手になる記念の碑である。ユタ州ではカモメを保護鳥として大切にしている。（「歴史粹」四六七―四六八「英文」参照）。

（モルモンの教義、余録つづき）

金版をテーブルの上に置いた。そのテーブルは部屋の真中にあった大きなテーブルであって、その下にはたくさんの版が二フィートの高さにも及んで積み重ねてあり、そのほかに部屋の四隅と言わず壁ぎわと言わず、おそらく何台という馬車に載る位たくさん版が積み重ねてあった。最初二人がそこへ行った時にはレーパンの剣が壁にかけてあったが、二度目に行った時にはそれが取り下ろされ、さやから抜いてテーブルの上に置いた金版の上へ筋かいのせてあった。そしてさやの上には次のような言葉が誌してあった。「この世の王国がわれらの神とそのキリストの王国となるまで、この剣は再びさやに納まることとなるべし」と。私が勝手ながらこれらの話を話すのは、これが忘れ去られ失われてしまわないためである。カルロス・スミスは私たちの知っている青年の中で一番誠実な青年であるから、これらの事の証人である。サムエル・スミスはいくつかの事を見た、またハイラム・スミスもたくさん事を見たが、最も多くの事を見たのはジョセフであった」（「教義と聖約の註釈」四十八頁参照）。

（聖地を巡りてつづき）

四軒程訪ねたが一方の時にロンアンゼルスから一度帰郷しただけの岡畑姉妹が宣教師として日本に来て働いて居られると聞いて皆びっくりし是非帰米前に一度訪ねるように言って下さいと頼まれた。何枚かのファミリー・グループ・シートを作成したがその死亡の欄には、昭和二十年八月六日の記念すべき日が幾つか記入された。又親戚を皆写真に撮ってシートと共に岡畑姉妹に差上げた処、お母さんにとっても似ていると言って喜ばれ、知らない地を訪ね歩いた甲斐もあったと嬉しかった。

田口兄弟も山形長老の系図を手伝う為郷里の熊本迄一緒に行くのだと張切って三宮を立たれたが、これからこのように二世の方の系図探求のお手伝いをする仕事が増えると予想されるので各支部系図委員の尙一層の御奮闘を期待する次第です。



〈大会の説教〉

「人はまた生きるにちがいない」

ミルトン・R・ハンター

(七十人会最高評議委員)



死不滅になりたい、すなわち限りなく生きたいというのは、あらゆる人類の心にひそむ生れつきの欲望または信念というべきものである。

信者に対して強い満足を与えている多くの宗教は、みな人間の不死不滅性を強く教えている宗教である。これらの宗教は特に悲みの時、愛する者に死に別れた時に、悲嘆に沈んでいる人々になぐさめを与える力をもっている。

「人がもし死ねば、また生きるでしょうか」(ヨブ記十四〇四)。これは人類の歴史が始まってこのかた、全世界に於ける数知れぬほど多くの人々が直面してきた問題である。この世に於て長生きがしたいばかりでなく、死んでから後もよみがえりたいというのは、誰でもが心の奥深く抱いている望みである。不

キリスト教の中心は、永遠の父なる神が生みたまうた誰一人の御子、すなわち救い主なる神であるイエス・キリストであり、イエス・キリストは実在した歴史上の人物である。キリスト教に対する競争者であった、すべての異教は、神話的(架空の)救い主なる神を持っていた。これらの宗教がもっている神話によると、異教の神の中には必ずしも道徳

的でない神々もあった。これを以て見れば、キリスト教は当時のあらゆる宗教に優越した宗教であった。

イエスは次のように教えたもうた。すなわち

「われは世の光にしてまた世の生命なり」(ニーフアイ第三書十一〇十一、およびヨハネ伝八〇十二参照)。「わたしはよみがえりであり、生命である」(ヨハネ伝十一〇二十五)。「この言に命があった。そして命は人の光であった」(ヨハネ伝一〇四)と。イエス・キリストの中に「永遠の生命」が見出される。「永遠の生命」を与えるためにイエス・キリストはこの世に來りたまうた。

この驚嘆すべき教えは、ラザロの死を例にとるとよく説明せられる。君たちが思い出されるように、ラザロはイエスが非常に愛して居りたまうたマルタとマリヤの兄弟であった。或る時、ラザロは非常に病気が悪くなった。ラザロの姉妹はイエスに早くおいで下さるように言伝てをしたが、イエスは仲々おいでにならなかった。そうこうするうちにラザロは死んで葬られた。それから四日経ってようやくイエスがおいでになった。マルタはイエスがおいでになったと聞いて走って行って

出迎え、

「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたくしの兄弟は死ななかつたでしようものを」と言った。するとイエスはこれに答えて

「あなたの兄弟は必ずよみがえる」と言いたもうた。

マルタはこれを聞いてイエスに

「終りの日のよみがえりの時よみがえることは、よく存じております」と答えると、イエスは次のように忘れることのできない驚嘆すべきことを言いたもうた。

「私はよみがえりであり、命である。私を信ずる者は、たとひ死んでもよみがえる。」

「また生きていて私を信ずる者はいつまでも死なない。あなたはこれを信ずるか」と

(ヨハネ伝十一〇二十一、二十三―二十六)。

マルタはこれを聞いて「主よ、信じます」

と答え、さらに「しかし、あなたがどんなことをお願いになつても、神はかなえて下さることを、私は今でも存じています」と言った

(ヨハネ伝十一〇二十七・二十二)。

そのころマリヤがやって来たが、胸の中には始めマルタが言つたと同じような考えを抱いていた。イエスはラザロを葬つた墓のそこ

ろへ連れて行つてくれとお頼みになり、一同が墓に到着したとき、主はその場に居た一同の者に、ラザロを葬つた洞穴の口を塞いでいる石を取り除けよと仰せになった。イエスの霊は人知れず激しく苦しみ、心からへり下つてイエスの父なる神にお祈りになった。祈つてから「大声で『ラザロよ、出てきなさい』と仰せになった」(ヨハネ伝十一〇四十三)。

すると、ラザロは死んでから早や四日経つていたにも関わらず墓の中から出て来た。この驚嘆すべき出来事は、たとへ人が死のうとも、人は死ぬのではない再び生きるにちがいないという明確な証拠となるものである。

それから後、あるうららかな日曜日の朝のこと、マタイ、マコ、ルカ等の福音書によると、マグダレナのマリヤ、主イエスの母であるマリヤ、そのほか主が愛して居りたもうた女の人たちが、香料を塗つた主の体が横わつてゐる墓所を訪れた。この人々はもつと立派な葬りを営みたいと思つてここへやつて来たのであつた。墓所へ来て見ると、入口を塞いでいた大きな石はすでに転がされ、入口は開いてゐた。中に入つてみると若者、すなわち一人の天使がそこに坐つてゐた。この若者は「真白な長い衣を着ていて、」驚ろくこと

はない、あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを探しているであらうが、イエスはよみがえつてここにはおられない……」と言つた(マコ伝十六〇五・六)。

皆は墓所を後にして急いでエルサレムへ帰り、イエスのよみがえりをヘテロとヨハネに告げた。ヨハネの福音書が伝えるところによると、この二人の使徒は取るものとりあえず墓所へかけつけ、マグダレナのマリヤがそれに従つたとある。ヘテロとヨハネが墓所へ入つて見ると中はからであつた。また、遺体を包んだ亜麻布がきれいにたんで置いてあるのを見た。それから二人の使徒は墓所を去つてエルサレムへ歸つた。

しかし、マグダレナのマリヤははげしく泣きながら墓所の入口のところを立ち去りかねてゐた。すると彼女は誰かが自分の近くに居ることを感じたが、それは墓守りであらうと思つてゐた。ところが近くに居るその人が言つた「女よ、なぜ泣いてゐるのか、誰を探してゐるのか」と。彼女はこれに答えて言つた「もしあなたがあの方を移したのでしたら、どこへ置いたか、どうぞおっしゃつて下さい。私がその方を引きとります」(ヨハネ伝二十〇十五)。

そうするとイエスの「マリヤよ」という優しい声^{やさしい}がした。そこでマリヤはその声の主^{ぬし}がイエスであることを知って、流れる涙をぬぐい、イエスに向ってかけて行^ゆって「ラボニ」と大きな声で言った。

するとイエスは「私にさわってはいけない。私はまだ父のみもとに上^あっていないのだから。ただ、私の兄弟たちの所へ行^ゆって『私は、私の父またあなたの方^{かた}の父であり、私の神またあなたの方^{かた}の神である御方^{みかた}のみもとへ上^あって行く』と彼らに伝えなさい」と仰^{おほ}せになった（ヨハネ伝二十〇十七）。

このように、イエス・キリストはこの世に来て死ぬべき身を受けたまい、前に予任^{よにん}されなされた目的を成就したもうた。イエス・キリストはゲッセマネの園でもまた十字架の上でも、世の人の罪のために自分の血を流したもうたが、今や死の束縛^{そくわく}を断ち切^きって、最初に復活した者となりたもうた。イエス・キリストが墓からよみがえりたもうた如く、この地球上に生を受けたすべての者は墓からよみがえるにちがいない。実際、マタイ伝にはイエスが墓からよみがえりたもうた時のことが次のように誌してある。

「また墓が開け、眠^ねっている多くの聖徒^{せいと}た

ちの死体が生き返^{かへ}った。そしてイエスの復活ののち、墓から出てきて聖なる都^{みやこ}に入り、多くの人に現^{あらわ}れた」（マタイ伝二十七〇五十二・五十三）。

多分モルモン経は、キリストが復活されてから人間に現^{あらわ}れたもうた事に就いて最も美しい記事^{きじ}をのせているのであろう。キリストの体が十字架の上と墓所^{ぼくじょ}の中にあつた間に起^{おこ}つた三日三晩にわたる恐ろしい暴風雨と真の闇^{やみ}とが今や終^はつた。それは、イエスが世の光であることを象徴^{さうしやく}するにふさわしい美しく輝^{きら}やく朝であつた。

パウソテフルの地の住民^{じみん}たちは神殿の前に集^{あつ}つた。そして、その時から数日前^{すうじつ}に起^{おこ}つたいろいろの驚嘆^{きうたん}すべきこと、特にイエス・キリストに関することなどを論じ合^あつていた。すると突然、天から出てくるような声が話しかけるのが聞^{きこ}えた。この声は荒々しい声でもなく、また高い声でもなかったが、それでもこれを聞いた者たちの骨の髄^{みず}までつき通るようであり、「心が燃えるような感じを与えた」（ニーフアイ第三書十一〇三）。最初彼らはその声^{こゑ}が何を言^いっているか解^とらなかつた。彼らは天の方^{かた}をじつと見^みつめて、その声が二度三度と出てくるのを聞^{きこ}いた。すると三度目に

彼らはその声の意味^{みぎ}がわかつた。その声は

「わが喜ぶ愛子^{あいこ}を見よ。われはこれに由^よりてすでにわが名の榮光^{えいこう}を示しぬ。わが愛子に聞^{きこ}け」と仰^{おほ}せになつていた。「群集はその意味^{みぎ}が解^とつてまた天を仰^あぐと、天から一人の男の方が天降りたもうのが見^みえた。このお方は白い衣^{ころも}を召^よして……」（ニーフアイ第三書十一〇七・八）天から下り群集の真中^{まなか}に立つて「見よ、われはイエス・キリストなり。予言者^{よげん}らがこの世に來ると証^{あかし}をしたるその者なり。われは世の光にしてまた世の生命なり。われは御父^{みふち}がわれに授けたまいしかの苦き杯^{さかずき}をすでに飲^のみ、世の人の罪をわが身に引^ひき受^うけて御父の榮光^{えいこう}を示したり……」と仰^{おほ}せになつた（ニーフアイ第三書十一〇十・十一）。

群集がひざまづいて礼拝^{らいはい}をすると、イエスは群集に向^{むか}つて「汝らわが肋^{はたけ}にその手をさし入れ、わが手足にある釘^{くぎ}あとに触^ふれて、われがイスラエルの神にして全世界の神なること、またわれが世の人の罪を負^おうて一度殺^{ころ}されたることを知るために起^{おこ}ちてわれに近づ^かけ」（ニーフアイ第三書十一〇十四）と仰^{おほ}せになつた。

このように、イエス・キリストは自分が復活^{ふくたつ}なさつた救世主^{きうせいしゅ}にして人類の救い主である

ことをニーファイ人にお見せになった。そこで群つていた人々は近よつてその手をイエスの肋にさし入れ、またイエスの手足にある釘あとに触れた。それからみな一せいによばわつて「ホザナよ。いと高き神の御名を讃美す」と言い、イエスの足もとにひれ伏して礼拝した（ニーファイ第三書十一〇十七）。

このことがあつてから、イエスは十二人の男を使徒に選びたもうた。そして、彼らとほかのニーファイ人たちに福音を教えたもうた。復活したもうた救い主は、前にユダヤ人の間でなされたよりも大きな奇蹟さえも、これらニーファイ人の中で行いたもうた。そして数日の間、これら古代アメリカの住民たちに導きと恵みを施したもうた。

或時イエスはニーファイに、汝の民の記録をもつてきて見せよとお言いになった。そこでニーファイが民の記録をもつてきて見せると、イエスはこれに目を通してから、「われ誠に汝らに告ぐ。われレーマン人なるわが僕サムエルに命令を与えたり。その命令は、御父われによりてその御名の栄光を示したもう日に多くの聖徒死者の中よりよみがえりて多くの人々に現われ、これに導きと恵みを与うということを、この民に予言してその証を

なせということなり。されど如何に、その予言は事実となりて現われしにあらずや」とお言いになった。そこで弟子たちは答えて「主よ、サムエルは今主が仰せになりたる通り予言して、その予言はすでに皆事実になれり」と申し上げた。

キリストは、これらの大切な予言とその実現とを記録することを怠らぬようニーファイ人に訓戒を与えたもうた。そしてニーファイに「このことも書き誌しておけと言いたもうたので、イエスの言葉のように記録した」。

おそらくイエスは、人間はたとえ死んでもまた生きるにちがいないことを知る助けとなるよう、末日に於ける人々のためになる証として、これらの大切な出来事を書き誌することを望みたもうたと思われる。古代アメリカに起つた最も大切な出来事でなくとも、最も大きな出来事の一つは、復活なさつた救い主が古代アメリカの住民に現われたもうた事である。それに関聯のある驚嘆すべき出来事の物語は、ニーファイ第三書に美しく語られている。

この中にあらわれているニーファイ人は、キリストが教えたもうた真の宗教に背き、後年一つの国民として滅亡した。そしてこれを

滅ぼしたレーマン人もまた墮落した、異教を奉ずる、背教の民になり下つた。それにも関わらず、キリストとキリストが古代アメリカを訪れたもうたことに關聯する主要な考えは、幾世を経ても変らずに伝わっている。

アメリカ大陸の発見につづいて、ヨーロッパ人はインディヤンのいろいろな種族を訪れた。そしてこのインディヤンたちからヨーロッパ人は、實際ほとんどすべての種族が、彼らの先祖に白色の皮膚をしたひげのある神が現われたという強い伝説をもっていることを知つた。

この神はその時に、今のアメリカインディヤンの先祖たちに彼らの文化と宗教とをお与えになった。この先祖たちの心に刻み込まれた印象がきわめて深かつたから、彼らの子孫であるいろいろなインディアン種族は、復活したもうた救世主に關する歴史と教えの主な部分を詳細に今も憶えているのである。

スペイン人のカソリック神父は、アメリカインディヤンの宗教がキリスト教によく似ていることを発見して「新世界では悪魔がカソリックの神父の先を越して、インディヤンの心の中に、にせのキリスト教を入れた」と公言した。アメリカインディヤンの宗教を研究

してみると、或る点に於て彼らのキリスト教は、彼らの征服者であるスペイン人のキリスト教とほとんどそっくりであることを示していると思われる。

私の親愛な兄弟姉妹よ。「……私は知る。

私を贖う者は生きて居られる。後の日に彼は必ず地の上に立たれる。わたし皮がこのように滅ぼされたのち、わたしは肉に在って神を見るであろう」(ヨブ記十九〇二十五・二十六)。私は知っている。アルマ書の中で、アミレクが証しをしているように「老若男女の区別なく悪人と善人とを問わず、奴隷と自由人とのへだてなく」イエス・キリストの贖罪、すなわちイエス・キリストの恩恵によって、万人は墓からよみがえって不死不滅となることを。私はまた、各人は救世主の裁きの座に立って、「死ぬべき身」を持ったこの世でしたことの裁きを受けるにちがいないことを知っている。私たちは、私たちがしたあらゆる行い、口から出したあらゆる言葉、心の中で考えたあらゆる念^{おも}いに対して責任がある。

更に私は、イエス・キリストはその贖いによって私たちに不死不滅を与えたもうばかりでなく、救いに関する福音の計画を通して

「永遠の生命」を得る方法も備えておきたもうたことを証しする。もしも私たちが忠実に神の誠命を守り、あらゆることに対して充分に従順であるならば、復活のときによみがえって天父と御子のもとに帰り、立派な

エキザルテーション
「昇 榮」すなわち「永遠の生命」を受けるにちがいない。私たちがそのようにするよう、神の祝福あらんことをイエス・キリストの御名によりへり下って祈り奉る。



「チリ津波災害地・志津川だより」

心の貧しき人

阿部 順 夫

(仙台支部)

二十九度五分という真夏の様な暑さに、漸く生気を取り戻した町の様子が、また沈滞せぬかと案じられるそんなこのごろの志津川です。過日はお心のこもった救援の品々をほん

きなプラスであり、厳しい現実によく耐えて生き抜く為の大きな支えとなっている筈です。

今度の思いがけない災害には全国各地のいろいろに人々から数えきれぬ程多くのお見舞をいただき、この町のひとりひとりが、同胞愛といましようか人々の暖かい心が結びついた力の偉大さというものをしみじみと感じているようです。はた目でも涙がこぼれるような美しい愛情のやりとりをこの数十日間何度眼にしたことでしょう。そして、人間の非常に醜い一面に度々接したこともまた事実です。人間の持つ善悪の極端な両面が、この様な状況では、圧縮凝固されて現われるもの様です。普通なら何の感激ももたらさない些

細な事柄もこの様な異常な条件の下

では敏感に響くのです。未来を失な

った人々にとって

慰め励ましてくれ

る味方があること

を知ったことは大

をつかんでいるのではないかと……

三日目のみそ汁の味忘れぬと

居合わせた人みな言いて飲む

津波から三日目。何の事はない湯に味噌を溶かしただけの汁の味を忘れ得ぬものとして受け取った。本の好きなこのセムシの少女は、不自由な身体にハダシで水の中を逃げたことも忘れて、今、眼の前にあるさ、やかな幸福を感謝して受け取ったのです。はた目には哀れを誘う話かも知れませんが、憐れまれるべき彼女はほんの些細な現実の中に、目ざとく幸福の芽を見つけ、それを育てようとしているのです。

この町の経済的な見通しは暗く、以前からの行きづまりがいよいよ窮地に陥ったかたちですのに人々の顔が明るいのは、今なお、三日毎に頒布される全国の兄弟達の愛の贈り物を受け、人間を信じて生きる希望を胸に持っているからなのだと思えます。

細長く湾を包む緑の岬と濃い海の青さとは早くもその美しさを回復しましたが、街はまだ泥の悪臭が漂い、人々はその悪臭と取切れぬ山の中で回復の努力を続けているのです。

お話し申し上げたいことは無限にあるのですが、この辺でお便りのペンをおかねばなりません。

最後にもう一度、本当にありがとうございます。贈り物を感謝して受けとるであらう人々に代わって心からお礼申し上げます。主の恵みと導きの豊かならんことを遙かに祈りしつゝ。

敬具

(阿部兄弟は今回のチリ津波で最も被害が多く数十名の犠牲者を出した宮城県志津川の志津川高等学校の教諭であり、仙台支部所属の会員であります)

名馬奇談

逃げのびる敵将のあとに追いつがった馬上から、ここぞと放たなければならなかった矢を暫し引き留めて「衣のたてはほころびにけり」と大声に呼ばった声の下から、「年を経し糸の乱れの苦しさに」と直ちに近づけたゆうに優しい敵将の心根に天晴れと感じ入って、ひた走りに去り行く敵将のあとをそのまま馬を留めて見送る名將の姿。荒涼とした奥州の山河に比べて「朝日に匂う山桜花」の照り映える見事な姿そのままに、今に伝わるその名は八幡太郎義家。これはわが国に伝わる武將伝説の一コマとして大ていの人を知っている有名な話であるが、偉人名將の心は洋の東西を問わず、時の今昔にかかわらず、凡庸の徒を抜きん出でいつも人の心を動かすことに変わ

りがない。

砂漠と言えどゴビの砂漠、サハラ砂漠、アラビヤの砂漠と世界にその名も多いが、中でもアラビヤの砂漠の名は、世界に誇る名馬アラビヤ馬の名と共に多くの人の知るところである。何故アラビヤに名馬が多く産するかそれは日本では何故南部の馬がもてはやされるかという質問に対する答えと同じである。南部地方でもアラビヤでも馬は家族の一員である。人間の愛情がそのまま馬に伝わっている。名馬はその家の主人の誇りであってわが兄の如く大切な宝として育てられている。

さて、ある時アラビヤの酋長が一頭の名馬を持っていた。その馬は姿と言ひ、駿足と言ひ、かんの良さと言ひ、その名は近隣にとどろいていた。ところが「モルモン経の新研究」でお解りになったことと思うが、掠奪、襲撃は砂漠の常である。砂漠の人は絶えず襲撃から身を守る構えをして生活をしなければならぬ。襲撃者は必ずしも人間ばかりではない。旋風、砂嵐、突然の豪雨、これらもみな容赦のない襲撃者である。絶えず襲撃から身を守っている者は、事情によって一転掠奪者となる。このようにして掠奪、襲撃が砂漠の常とどろいていたと同時に近隣からねらわれていた。ねらわれていることはよく解っていたから、その酋長は水も洩らさぬ警戒を怠らなかつたが、攻める者はいつも守る者に勝つ。僅かのすきを突いてとうとう盗まれた。しかし走り去るひづめの音を耳にして酋長は「それ

っ」とばかり第二の駿馬にまたがってその後を追いかけた。

二頭の駿馬が砂を蹴立てて追いつ追われつ走り行く姿はまことに見事なものであった。しかし、いかに名馬といえども乗り手が変わるとその駿足を發揮し得ないものか、二頭の馬の距離は次第にちぢまって来た。今や酋長の乗った馬がさきの馬に追いつがって、とうとうつかまつたかと思われた瞬間、酋長が何か一声大ごえに叫んだ声に應じてさきの乗手がその名馬の右の耳をつかんで一ひねりすると見るや見事な跳躍。まことに天馬空を行くが如く、またたく間に後の馬を引き離して走り去っていった。その見事な跳躍振りを見ながら酋長は深い息と共に満足そうに言った「あいつはよく走るなあ」、その顔に微笑さえ浮かべながら。

さて、アラビヤ馬の持主は決してその馬に鞭を加えない。鞭を加える代りにその持主の持っている独特の信号を馬に伝える。これは持主とその馬との間にだけ解っている秘密である。さきの酋長は馬盗人に向って何と言ったであらうか。彼は「右の耳をつかんでひねれ」とその秘密を伝えたのであった。そのことがどこからともなく人に伝わり、やがて友人の酋長の耳に入った。その友人が「君、つまらんことを言ったものだ、それでは玉なしではないか」となじるように問いかけた時酋長は笑みを含んで答えた「わしはあの馬の名譽が欲しかった。あの馬は今でも名馬なんだ。誰が持っていようと」。

末日聖徒イエス・キリスト教会歴史粹

(八)

ジョセフ・フィールディング・スミス著

第二部 時満ちたる神権時代の開始

第六章 ジョセフ・スミスの少年時代

(千八百五年—千八百二十年—)

六会議を開く(つづき)。「……あなたは骨を削り取って病氣にかかった部分を取り出すことができませんか。どうか。そうすれば健全なところが多分癒着しますから、この方法であの子の足は救えるにちがいありません。もう一ぺんやってみるまであの子の足をとって下さいますな。いいえあの子の足をとってはいけません。この約束をして下さるまではあの子の居る部屋へ入っていただくことに私は同意いたしません」と(私は主^{おれ}だった外科医に向って訴えた)。

外科医たちは少しの間互いに協議した末、私の頼み通り

にすることを承知した。それから彼らは苦しんでいるあの子を見に行った。医者の一人は寝台に近づくと言った「かわいそうに。またやって来たよ」。するとジョセフは「はい、来たことがわかりますよ。しかし、私の足をとりに来たのではないでしょうねえ」と言った。その外科医は「いやいや、もう一ぺん骨を折って下さいというのが君のお母さんの頼みなんだから、それで今やって来たわけさ」と答えた。

その主^{おれ}だった外科医はちょっと言葉を交^かしてから、ジョセフを寝台にしっかり縛りつけるために紐をもってくるように命じた。しかし、ジョセフはこれに反対した。しかし、その医者がジョセフに向って、君は寝台に縛りつけられなくてはならないと強く言うのと、これを聞いてジョセフはきっぱりと言った「先生、私はどうしても縛られませんが。自由になっているならずっとよく手術に堪えることが

できるからです」と。「それなら、ブランデーを少々飲まないかい」とストーン先生が言った。「いいえ、一滴も飲みません」とジョセフが答える。これに対して先生が「葡萄酒を少々飲まないかい。何か飲まなくてはいかんよ。さもないとこれから受けなくてはならないひどい手術に堪えることができないよ」と言い返すと、ジョセフは大きな声で言った「いやです。お酒は一滴も口にしません、また寝台に縛りつけられもしません。しかし、私のこれからすることを言います。私はお父さんに、寝台の上に座って私を抱きかかえてもらいます、それから骨をとってもらうために必要なことは何でもします」と。次に、ジョセフは私の顔を見て言った「お母さん、お母さんはこの部屋を出て行って下さい。私が大変苦しむのを見ることはお母さんに堪らないことを知っているからです。お父さんは堪えることができますが、お母さんは私をあんなにたくさん支えていて、あんなに長い間看護して下さったから、ほとんど疲れ切っています」と。それから私の顔をじっと見上げ両眼に涙をいばいたためて言った「でわお母さん、ここに居ないと約束して下さいね。主はきつと助けて下さいますから私は手術を首尾よく切り抜けます」と。

私はこの願いを聞き入れ、数枚のたんだシーツを持ってきてこれをジョセフの足の下に敷き、部屋を出て、声が聞こえないように数百ヤード離れたところへ行った。

七、手術。

「外科医たちは最初悪くなった骨の片側に穴を開け、次にほかの側にも穴を開けて手術を始めた。穴を開け終ると鉗子を使って骨を折り取った。このようにして大きな骨片が取り去られた。外科医たちが最初の骨片を折り取ったときにジョセフが大声で悲鳴をあげたから、私はこらえ切れずにジョセフのところへ走って行った。私が部屋の中へ入るとジョセフは「お母さん、帰って下さい、帰って下さい。入ってきてはいけません。出て行って下さるなら辛抱し通してみます……」と言った。

私はすぐに部屋から押し出されて手術が終わるまで留めて置かれた。しかし、処置がすっかりすんでジョセフが清潔な寝台に横たわり、部屋の中に少しも血の様子がないように掃除され、手術に使った器具をとりかたづけると私は再び部屋に入ることを許された。

八、ジョセフ健康になる。

ジョセフは手術後すぐに体の加減がよくなり始め、それからずっと快方に向ってとうとう強壯な体になった。ジョセフは旅行が出来るほど健康が回復したとき、海の微風そよかぜが健康のためになることを期待して、療養のために叔父のジェス・スミスと一しょにサレムへ行ったが、この期待は彼に背かなかった。

九、ニューヨーク州へ移転。スミス一家は、一年というものの病気の絶え間がなかった。この不幸は引きつづく三年間の不作と共に一家をやや貧乏にした。一家の者は非常

にがっかりしたので、彼らの仕合せをもう一度取り戻すもつと良い機会があるにちがいない西部ニューヨークのもつと氣候の温和な、もっと土地の肥えている地方へ移転するという決定を下すに至った。

いろいろな支度ができ、またいろいろな義務を清算してしまふとすぐにジョセフ・スミスとその一家はニューハムプシャーの家から三百マイルほど離れているニューヨーク州のパルマイラへ移って行った。家族の一人一人は今や自分たちのとるべき道について相談した。そしてパルマイラの南方約二マイル、マンチエスター町の境界のほとりにある約百エーカーの土地をとうとう買うことに決めた。記憶すべきは、西部ニューヨークは当時まだ居住している人々が稀であつてオハイオ、ミシガンおよびイリノイの諸州はなお大部分荒野の状態にあり、「ミシッピ」の大河を越えたかなたにはほとんど人の知らない広漠たる土地があつたことである。それから十年以上もたつて、主はジョセフに下したもうた啓示の中で「レーマン人の境なる」とミズーリのことを言いたもうた。

十、家を作る。パルマイラへ引越してきたときに、二人の息子のアルヴィンとハイラムとは彼らの新しい家を作るために実質的な助力をすることができた。二人の息子たちは父親と一しょに密林を切り開いて、新しく手に入れた土地の開墾に着手した。百年前にその地方ではどこへ行つ

ても密林に覆われていた。最初の一年に彼らは約三十エーカーの土地を開墾した。これだけでも容易ならぬ仕事であるのに、その上彼らは機会があれば自分たちの負うている債務を支払うに足る資金を調達するために時々一日の労働に従事した。このようにして、第一年目の中に彼らはその土地に関する第一回の支払の大部分を払うことができたが、その土地は最初の年の中に耕作する状態になつていなかった。母親はそのためまぬ勤勉によつて一家に必要なものを備える仕事を引き受け、筆で彩色した油布のテーブル掛けを売つてその責任を果たした。母親は油布のテーブル掛けに彩色をすることに全く熟練していて、これによつてかなりの成功を収めた。

十一、マンチエスターへ移る。スミス一家はパルマイラへ着いてから四年ほど経つて農場へ移転しそこに四間の丸太造りの家を建てた。そして後から裏の方に幾間かの寝室を建て増した。ジョセフがかの栄光に満ちた示現に接したのはこの家に住んでいた間のことであつた。長男のアルヴィンが指図をしてもつと広々とした家を建てるのが計画された。アルヴィンは両親が安楽に住まうのを見たいと切に願つていた。「私は父母が居るための立派な気持ちの良い部屋を一つ造らうと思つてゐる。そして父母を安楽にするために何でも備えて、もう今までのように働かせない」と彼は言つた。彼の父母は二人を貧乏の伏魔にまぎ

し入れた試鍊と艱難の最中に大へんな苦勞をして働いてきたのであったから、これはまことに氣高い考えであり願ひであつた。

十二、アルヴィン・スミスの死。

アルヴィンはこのように予期した祝福を實現しないで、また彼の夢が成就することを見ないで世を去つた。千八百二十四年の秋に新しい家の棟上げが終り建物を完成するに必要な材料が手に入つた。しかし、その年の十一月アルヴィンは病に冒された。彼は十一月の十九日に二十七才の若さで亡くなった。彼は生きてゐるうちに、天父と御子の訪れがあつたことと、モロナイが来たことを聞いて知つていた。そしてこれらの事は真実であると確信していた。彼は弟ジョセフのために祈りをすると共に、ジョセフの管理に委された大事業に忠実なれと彼に戒めを与えて亡くなった。アルヴィンは「類いのない美点と親切且つ優しい性質とを具えた青年」であつたと人々に言われている。

十三、神の御手。

スミス一家の出逢つた数々の不幸は堪え難いものであつたとは言え、すべては彼らのために主の御意によって支配されたのであつた。もしも彼らがヴァーモント或いはニューハンプシャーにそのまま住んでいたら、主の有ちたもうた目的はむしろ達成され得なかつたであらう。主は青年ジョセフが果すべき大事業を有ちたもうたから、スミス一家がジョセフの活動する舞台へ移つ

て行くのは必要なことであつた。それであるから、スミス一家は艱難の谷を通じて、主が彼らのために備えたもうた所へ御手によって導かれて行つた。

第七章 示 現 (千八百二十一年)

一、ジョセフ・スミス體驗を語る。天父と御子がジョセフ・スミスに現われたもうた驚嘆すべき示限の物語はジョセフ・スミスが全く飾り氣なしにそれを述べているときスミス自身によって何よりも最も効果的にまた明瞭に語られてゐる。それであるから、その話をここにくり返して記すことにする。

「私たちがマンチエスターに移つてから二年目のある時、私たちの住んでいた土地に宗教上の非常な騒ぎが起つた。この騒ぎはまずメソジスト教徒から始まつて、間もなくひろくその地方の全教派に及び、誠に地方全体がそれにとりつかれたようであつた。大勢の群集がこぞつていろいろな宗教的党派に分れ固まり、これらはその人々の間に一方ならぬ騒ぎと仲間割れとを引起して「ここを見よ」と叫ぶ者もあれば、「かしこを見よ」と叫ぶ者もあり、或者はメソジスト派の教義を擁護して論じ、また或者は長老派、浸礼派の教義を擁護して論じた。これらさまざまの信仰に転じた改宗者たちが、その改宗に當つて言い表した偉大な愛と、またあらゆる人々を改宗させるために、牧師らが好

んで言った言葉であるが、あらゆる人々をその好む教派に加入させるために、この宗教的感情がただ事でなく興奮した場面を引きし、これを助成するに当って活潑な働きをした各牧師たちの示した偉大な熱心さがあつたにも関わらず、しかも改宗者たちの或者は何派、或者は別の派と所屬が定まり始めると、牧師たちも改宗者たちも、両者の示す表面上の好感情は真実と言うよりはむしろ擬装的と思われた。それはこれに引つづいて、牧師は牧師に向い改宗者は改宗者に向つて争論する一大混乱と反感の場面が起つて、その結果すべてお互いの間の好感情は——もしいくらかでもそんなものが最初あつたとしても、今は全く言葉争いと所信の論争の中に影もなくなつてしまつたからである。

「私はこの時満十四才を越えた才であつたが、父の家族は長老教会に改宗して、家族のうち四人、すなわち毎のルシイ、兄弟のハイラムとサミュエル・ハリスンおよび姉のソフロニヤがこの教会に加入した。

二、宗教的動揺の時代。「この大騒動の間に、私の心は深刻な反省を促がされまた非常な不安を感じた。しかし私の感情には痛切なまた折々胸をさすようなものがあつたにも関わらず、なお私はすべてこれらの連中から超然として居た。しかし機会の許す度に彼らの催すいろいろな集りには出席した。こうしている間に、私の心はややメソジスト派に傾き彼らに加わろうとする願望を何ほどか感じた

が、何分いろいろな教派間の混乱と争闘が激しかったから、私のような年もゆかず世故にも長けていない者にとつては、何人が正しく何人が間違っているかなどのしつかりした結論を得ることはとてもできなかった。私の心は時々ひどくかき乱され、外の叫び声と騒ぎは非常なもので絶え間なかった。長老派の信徒は浸礼派の信徒とメソジスト派の信徒に最も断乎反対し、あらゆる理屈ときべんと両つながらの力を用いて反対派の誤りを証明し、または少くとも世の人に反対派が誤っていると思わせようとした。これに反して浸礼派の信徒とメソジスト派の信徒は、その代り自己の教理を打ち建てて他がことごとく誤っていることを証明しようとする熱心に努めた。



バプテスマ

阿倍野
福岡
普天間
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
應島
名古屋
那覇
新潟
西ノ宮
岡町
小樽
三ノ宮
札幌

柴山昭子	津田直昌	早坂勝彦	天谷隆彦	山口信一	堀内三知子	川岸とみえ	工藤良子	大塚富子	大屋民夫	岡友栄	柳田シズ子	他に韓国に二十七名のバプテスマがありました。
〃	〃	仙台	〃	〃	東京中	〃	〃	〃	〃	横浜	〃	
神権												
(執事)												
山中シンカイ	深沢弘信	赤塚一彦	磯石和也	渡会和彦	アリハシシオジロオ							
金沢	松本	小樽	札幌	〃	阿倍野							

盛永 保功 谷川 俊博 小田 博 築田 博 河原地 富雄 コシバ ケンゾオ 若松 ミチノリ トオマ ケンジ 坂本 恒夫 佐藤 貢 渡会 功 神崎 良太郎 高柳 郷行 山田 友次 岩崎 和夫
 () 教師 北野 トモユキ ネンガキゴオタロオ 大畑 浩一 小島 トシオ 土田 和夫 引寺 辰人 加藤 武行 成林 孝治 佐藤 イサオ アラキ ケイイチ 児島 吉彦

旭川 〃 応島 〃 松本 〃 名古屋 〃 那覇 〃 〃 〃 東京北 〃 〃 東京西 〃 横浜 〃 金沢 〃 東京西 〃 柳井 〃 阿倍野 〃 旭川 〃 〃 室蘭 〃 那覇 〃 札幌

倉見光男	鮫島邦彦	高橋良臣	杉浦高安	○祭司	兄王榮治	相良健一	松島ヤスヒロ	平野隆弘	木野隆弘	小林肇功	岩井邦次	小泉裕功	他に韓国に執事四名、教師五名 祭司二名の聖任がありました。	任命	シミズ・マサル長老	レイモンド・ササキ長老	ビーター・ブラック長老	カール・リード長老	レイ・R・ゲイゲル長老	新潟支部長
〃	〃	〃	東京北		松本	横浜	名古屋	札幌	〃	〃	横浜	〃			柳井支部長	仙台支部長	三ノ宮支部長	阿倍野支部長		

支部所在地

阿倍野 大阪市阿倍野区阪南町中一ノ三八
旭川 旭川市八条五丁目
福岡 福岡市菜院大通二ノ五五
群馬 高崎市並根町二七五
広島 広島市古田町古江四〇〇ノ三
金沢 金沢市成瀬町一ノ四 野田方
甲府 甲府市富士見町一
松本 松本市沢村一六〇四
室蘭 室蘭市幸町八九
名古屋 名古屋市中区和区北山町三ノ四一
新潟 新潟市中大畑町五五七 金井方
西ノ宮 兵庫県西ノ宮市田代町一一一
岡町 大阪府豊中市岡町北二ノ一八
岡山 岡山市国富一ノ一九 丹下方
小樽 小樽市富岡町一ノ三五
三ノ宮 神戸市灘区篠原本町四ノ三五
札幌 札幌市北二条西二四丁目
仙台 仙台市光禅寺通り二八
東京中央 東京都渋谷区八幡通一ノ三四
東京北 東京都豊島区椎名町四ノ二〇六八
東京南 東京都大田区南千束町二四九
東京西 東京都武蔵野市吉祥寺三六八
山形 山形市諏訪町三九七
柳井 山口県柳井市今市三九一
横浜 横浜市中区磯原町二九
横浜 横濱市港北区篠原町二九
普天間 沖縄宜野湾村野嵩区三三八
那覇 沖縄那覇市松尾区一三九

編集後記

毎日猛暑がつづきますが愛読者の皆様御機嫌いかがですか、暑中御見舞申上げます。都会では焼けつく暑さをのがれて海に山に涼を求める人々の数が何十万、多いときには百何十万人と報ぜられています。しかしながら昔からの瑞穂の国であります。わが国では、夏はいよいよ暑く、冬はいよいよ寒くなければ豊作を期待することが出きません。この猛暑はまた六年つづきの豊作の前ぶれかと思えば辛抱する気持ちが湧いて参ります。さて「聖徒の道」編集局はこの度発展的解消を致しまして、今までの編輯同人が一度解散し、再び陣容を一新致しまして捲土重来することになりました。九月号には増員された編輯部員の方々による興味深い生き生きとした記事が満載されて、愛読者の皆さまの机を飾ることと思つて居ります。室内では猛暑にうだつていても、もうすぐに「階前の梧葉既に秋声」を告げるようになります。「少年老い易く学成り難し」です。お互いに勉強致しましょう。皆さまの御健康をお祈りしつつ。(佐藤)



8月号表紙一かもめの奇蹟

月刊「聖徒の道」第四卷第八号

一九六〇年八月一日発行

実価 一ヶ年 三百円

一部 三十円

編集兼
発行人

ポール・C・アンドラス

発行所

東京都港区麻布広尾町十四

末日聖徒イエス・キリスト教会

北部極東伝道部

